

■鼎談



南部 靖之 (なんぶ やすゆき)
 ■1952年神戸市生まれ。76年関西大学工学部卒業。卒業1カ月前に人材派遣事業を創業し、パソナの前身であるテンポラリーセンターを設立。2000年パソナ代表取締役グループ代表、04年同業社長。関西大学の評議員、経営審議会委員のほか、首都圏在住の本学出身経済人が集う東京経済人倶楽部の会長を務める。

◆卒業生の生涯にわたる就業支援がスタート

森本 私は一昨年10月の理事長就任時に、「強い関西大学」をつくることを内外に宣言しました。その強さには、教育、研究はもちろん、就職に強いことも含まれています。本学は毎年、就職決定率の高さを誇っていますが、雇用情勢の変化や転職志向などにより、就職後3年以内に離職してしまう人が増えてきました。また団塊世代の再就職や、いったん家庭に入った女性の再就職など、既卒者からの相談も多くなり、既卒者向け求人票の閲覧サービスなどを行ってきました。これらのサービスをよりシステマチックに展開するために、パソナグループの株式会社関西雇用創出機構と提携し「卒業生就業支援室」を設置したわけです。今日はその提携先であるパソナグループ代表の南部靖之さんに来ていただきました。河田学長と共に、忌憚のない意見交換ができればと思います。

南部 今回は、お世話になった母校・関西大学に少しでもお返しができることを光栄に思っています。

河田 就業支援の内容は、専門のカウンセラーによるキャリアカウンセリングをはじめ、求人情報の提供、企業の紹介から就業上の悩み相談に至るまで幅広く、きわめてきめ細やかなものになっています。人材派遣30年の実績を持つパソナグループとの提携があってこそ実現できたサービスと、喜んでいます。

森本 昨年11月にこのサービスを始めて、卒業生から喜びの声が続々と届いています。年齢・性別を問わず、卒業生は全員、この支援を受けることができます。こうした取り組みは、全国でもほとんど前例がありません。私は常々、「仮に関西大学が99.9%の高い就職率を誇ったとしても、残りの0.1%の学生やそのご父母にとっての就職率は0%である。就職率100%を目指し、生涯にわたって卒業生の面倒を見ることは、高等教育機関たる関西大学の使命であり、責務である」と主張し

働くことは、「自分を表現する」こと

関西大学は卒業生の就業を生涯支援する

南部 靖之 ◆株式会社パソナ 代表取締役グループ代表兼社長
 森本 靖一郎 ◆理事長
 河田 悌一 ◆学 長

関西大学は、パソナグループの株式会社関西雇用創出機構と業務提携し、キャリアセンター内に「卒業生就業支援室」を設置、昨年11月から卒業生の就業支援を開始しました。卒業生の生涯にわたる就業支援は、「就職に強い関西大学」を内外にアピールするにとどまらず、フリーター・ニート対策、団塊世代の大量定年問題などの面からも注目を集めています。本学卒業生でパソナグループを率いる、まさに「時の人」南部靖之さんをお迎えして、大いに語り合ってもらいました。

僕はこの大学で、
 いかにして自分らしさを出すかを教えられた。
 「働くこと」は自分の才能・能力や
 個性を発揮すること、つまり「自分を表現する」
 一番の方法と考え、起業に踏み切りました。

てきました。その目標に向かって大きな一歩を踏み出すことができました。

南部 父親に続いて、僕も関西大学に入学し卒業しましたが、この大学のおかげで、今の自分があることを実感しています。勝ち組、負け組とか格差という言葉がはやる社会の中で、今こそ思いやりや人間の和が大切だと思っています。卒業生の生涯にわたる就職支援という形で「温かい大学」を世間に示し、母校に貢献できることは、僕にとってもこの上ない喜びです。

◆働くことは個性を発揮し、「自分を表現する」こと

森本 南部さんは、まさに「強い関西大学」の卒業生の代表ですね。

河田 強い卒業生の象徴であるけれども、老子のいう柔よく剛を制す、柔軟な面もありです。強いからこそ優しくなれるし、柔らかいながらも強いと言いますか…。

南部 僕は環境によって性格は変えられると思っています。高校生までの性格は、親の責任であり、社会環境の責任です。が、大学に入ると、自分でこういう人間になりたいと考えれば、自分で変えることができる。この大学は僕の性格を、ある意味強くしてもらった場です。

河田 南部さんは学生時代にインドを旅行なさり、卒業1カ月前に「家庭の主婦の再就職を応援したい」と起業して、人材派遣システムをスタートされました。学生ベンチャーの先駆けとして、この30年間、つねに新たな就労や雇用のあり方を社会に提案してこられました。誰も思いつかないような事業を、どうして始めることができたのですか。

南部 僕は両親から、働くことは自分を生かし、自分を知ってもらう「表現すること」だと教えてもらいました。大学に行くということは、その表現能力を養うことなんですね。大学で、ある人はスポーツをする、音楽をする…。僕はこの大学で、いかにして自分らしさを出すかを教えられた。企業に雇用されることは一つの働き方ではありますが、僕は「働くこと」は自分の才能・能力や個性を発揮すること、つまり「自分を表現する」一番の方法と考え、起業に踏み切りました。あの当時、教授、助教授、講師の先生方から「ばかかことを考えないで就職しなさい」と言われていたら、それこそニートになっていたかもしれません。僕の考えをじっくり聞いて、自宅にまで招いて勇気づけてくださった先生方には本当に感謝しています。

森本 今や世界に名をはせる起業家として活躍されています。先日、ホームパーティーに呼んでいただいたら、政界、財界のすごい方々が来ておられてびっくりしました。このような



森本 靖一郎 (もりもと せいいちろう)
 ■1932年奈良県生まれ。関西大学文学部国文学科、法学部法律学科卒業。母校に奉職し、67年に関西大学教育後援会幹事に就任。「大学と家庭のかけ橋」をモットーに、日本一とも称される強固な父母会組織を作り上げた。事業局長、常務理事を経て、2000年専務理事、04年10月理事長に就任。

人脈をどうやって形成されたのですか。
 南部 母親が幼いころから価値観の多様性ということを教えてくれたんです。絵がうまい人、数学が100点の人、スポーツ万能な人…みんな同じ才能だよと。だから、あらゆる人に対して、卑屈にならず対等に話ができたら交友の範囲が広がったんだと思います。人間の倫理観、正義感、人間としての生き方などは、やはり家庭教育が重要だと思いますね。僕は23歳で起業し、25歳で東京へ。10年間東京にいて、35歳でアメリカには夢があると思い、家族を連れてアメリカへ。そのころ、いろんな会いたい方々に手紙を書いて、会いに行きました。20年たってみると、その人たちが各分野のトップになっていたというわけです。
 河田 今の南部さんならともかく、一介の青年社長に、よく会ってくれたものですね(笑)。
 南部 そうですよ。昨年5月の5日間インドに行ってきたんですが、政府の幹部をはじめ閣僚がみんな会ってくれました。ありがたいことです。



◆「英雄は若者から生まれる」、都心に農場を開く

河田 会いたいと思ったら世界中どこへでも会いに行く行動派の南部さんですが、今の学生たちについて、どうお考えですか。
南部 ITなどの知識は豊富ですが、体力がない。それに、若者を勇気づけるべき大人が、マスコミを使って「ニート」とか「フリーター」という言葉で、若者は駄目だと決め付けている。15年くらい前は「新人類」、30年前の僕のころは「プータロー」、100年前は「浪人」。「この若造が」という言い方は千年も昔からある言葉ですが、最近はマスコミを通じて徹底的にやるのが問題です。歴史上、多くの革命は、たった数人の若者によって起こされました。「英雄は若者から生まれる」。殻を破るのは、いつの時代も若者です。
河田 若者に体力がないのは、子どものときから食育がされていないからじゃないでしょうか。米も野菜も、できたものしか知らない。どういうふうで育てられ、収穫され、食卓に上るのかを知らば、おのずと食事や健康に気を使い、食べ物を大事にして体力が付くのでは…。
南部 そうです。だから、ニート対策に農業は絶対にいいですよ。農業は感性を豊かにします。不登校がなくなります。
森本 それで、東京のど真ん中で米やトマトを作っているのですか。
南部 はい。農業での雇用創出を目指して昨年2月、東京・大手町のパソナ本社地下2階の都市銀行の金庫があったスペースに「PASONA O2」という“地下農場”を開設しました。若者たちに対して、農業の意外な魅力を強調したかったから、都会の真ん中に作ったんです。実は今の農業はハイテク産業で、ネクタイを締めたままだって稲刈りができるとか、若者

歴史上、多くの革命は、たった数人の若者によって起こされました。「英雄は若者から生まれる」。殻を破るのは、いつの時代も若者です。

にアピールしたかった。農業研修の説明会には、定員12名のところ130名余りが応募してきました。その中の13名が秋田県や青森県などで研修。朝起きられなかった人が、朝5時に起きるし、目の輝きが全然違います。
森本 そのビル菜園を関大に一部移植しませんか。これは生きた学問になります。
南部 本当に？ もう、最高ですよ(笑)。僕は、大地は発明の母だと思っています。ペニシリンも、あらゆるエネルギーも大地から生まれました。何より土を触ることは人間の感性を豊かにする。関大に農場を作って、カレッジワーカーとしてアルバイトで手伝ってもらおうとか、ぜひ、やりましょうよ。無農薬で収穫した野菜はおいしいし、健康にいいし、ITと農学部を併せたような学問ができます。

◆地に足をつけた、本当の意味で強い関西大学に

河田 ところで、本学では現在、工学部の再編や政策系学部の新設について鋭意検討を進めています。また生涯教育にも貢献したいと考えています。南部さんのご息が在学しておられる米国ニューヨーク州イサカのコーネル大学でも取り組んでいます。老人施設と大学が一緒になって、お年寄りに学ぶ場を提供する一方、学生は経験豊富な高齢者から教えるという形態のいわゆるカレッジリンクを考えています。
南部 それはいいですね。コーネル大学は、大学の中に街があり、谷があり、川があり、村がある。大学と街がイコールなんです。市民との交わり、コネクションがある。僕は、大学とは本来そういうものだと考えています。大学が、いくつになっても市民に学ぶ意欲を持たせてくれるから、街が活性化するんです。
森本 今、関西大学ではスポーツも強化しています。男子フィギュアスケートでオリンピックや世界選手権の代表選手が生まれるなど、素晴らしい成果が上がってきています。
南部 スポーツが強い大学には心がわくわくします。僕も毎日2時間、スポーツをやっていますし、テニスも学生時代から続けています。
河田 スポーツは学生文化のフロントランナーであると考えています。音楽や演劇、茶道などの文化活動だけでなく、スポーツによって引っ張っていく。これが関西大学のアイデンティティになるし、卒業生のアイデンティティをも結集することができます。
南部 健全な体に健全な精神が宿るといふか、倫理観、道徳観なども磨かれますしね。地域に入りやすいし、就職するにもいいですね。僕は、森本理事長が日ごろから話されている「強い関西大学をつくる」という方針には、とても共感しています。精神的強さ、体力的強さなど、日本の学生に一番欠けているところ。僕は35歳から43歳までアメリカで暮らし、

日米両方の学生を見てきました。日本人の学生は頭はいいのに、何でこんなに暗いんだろうかと思うことがあります。
河田 強い大学への一環として15の市の教育委員会と連携し、平成17年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に採択された、いわゆる「学校インターンシップ」も進めています。学生が小中学校や高等学校に行き、教育現場でさまざまな活動を支援し生徒のケアを体験することで、年長者としての自覚を持つとともに人間的に成長します。また吹田市、高槻市、八尾市、奈良県明日香村とも地域連携に関する包括的な協定を結んでいます。
森本 明日香村については、高松塚古墳発掘後、飛鳥史学文学講座を31年間行うなど、地域貢献に努めています。また、河田学長のリーダーシップで海外との連携も推進し、アメリカやヨーロッパはもちろんアジアや中南米諸国の大学とも協力関係が進んでいます。
南部 「地域に開かれた大学」の発想は、地元と同時に、ASEANやEUなどの連携やグローバルな視点にもつながります。国内に閉じこもってはいけません。僕は、みんなが自分の未来を夢見て、自分の人生を自分の意志で決められるようになればいいと思っています。いつかは「働く者と会社がイコールの時代」が来ます。会社に雇われるのではなく、一人ひとりが自分の得意分野を持ち、自分で仕事を作り、自分の給料は自分で稼ぐ——これはもう目前にきています。それを若者に気付いてほしいし、社会全体に提唱したい。今、アメリカでは労働人口の3人に1人がインディペンデントコントラクター(独立個人事業主)、つまり雇われるのではなく自分で独立しています。そういった現実を見据え、働く準備を大学教育とうまく結び付けなければならないのではないでしょうか。
河田 若者の起業と言えば、金銭至上主義にとりつかれたときライブドア事件も、きわめて影響が大きかったですね。
南部 何よりも僕が言いたいのは、汗水流さず、株を買って、株で儲けてお金ですべてのものが得られると、そんなことを若者に教えてはいけないということです。ライブドアは若者に夢を与えたと言う人もいますが、あれは欲望だけで夢じゃない。こうした考えを持つ人はいつの時代にもいました。今回はそれをもはやし、応援した大人がいたことが大問題です。彼らは、会社は株主のものだと言い放ちましたが、それだけではない。会社を辞書で引くと「法人」とある。法的に、組織を人と見なす。人とは社会的動物ですから、助けて助けられて、みんながいるから成り立つ。つまり会社は善き企業市民であって、ある意味株主だけのものじゃない、社会のものなんです。そこを間違っちゃいけない。
森本 だからこそ、パソナは農業なんですね。土に触れ、汗水垂らして働くことから始めよう。
南部 その通りです。地に足をつけた、本当の意味で強い関西大学にしていきたいと思います。
河田 南部さんをお手本に、世のため人のためになる品格ある学生を養成していきたいと思えます。
森本 今日は、有意義なお話をありがとうございました。



河田 梯一 (かわた ていいち)
 ■1945年京都市生まれ。大阪外国語大学中国語学科卒業。大阪大学大学院で中国哲学を専攻。和歌山大学助手、助教授を経て、86年関西大学教授。国際交流センター所長、文学部長、副学長を歴任し、2003年10月学長に就任。1980年に米国エール大学、91年に在外研究員としてプリンストン大学で中国思想史を研究。

意欲的な挑戦をサポートします
山本 絹子 さん (関西大学文学部1979年卒業)
 ◆株式会社関西雇用創出機構代表取締役社長

私どものオフィスに「関西大学卒業生専用コーナー」を開設して、その反響に驚いています。中には、ご自分が利用されるわけではないのに「素晴らしい取り組みをしてくれてありがとうございます」と、わざわざお電話をくださる方もありました。利用されるのは、今のところ約80%が20～30歳代の方ですが、団塊世代など中高年の利用も少しずつ増えています。年齢が高くなると再就職までに多少時間はかかりますが、意欲と自信を持って仕事に就かれる方もいらっしゃいます。主なサービス内容は、①専門のカウンセラーによるキャリアカウンセリング、②求人情報の提供・企業の紹介、③就業マッチング、④就職に必要な知識修得のための講座や訓練の受講、⑤その他、就業上の悩み相談、現職のアドバイス、などです。